Ⅱ．本　論

第１章　19 世紀末から第一次世界大戦までのオランダの近代化
－政治、経済、都市、文化における動向－

1-1.　はじめに

第 1 章は、1880 年代から設計活動を始め、1890 年代から独立して活動して独自の建築理念を構築していったベルラーへの社会・文化的な背景を捉えることを目的としている。オランダが 19 世紀半ばから第一次世界大戦頃までの間に、政治、経済、工業化、労働組合運動、社会主義運動、住宅・都市問題、文芸運動などの様々な側面において、どのような変化を遂げ、また同時にどのような問題を抱えていたのか、その動向を考察する。

1-2.　オランダの政治と労働運動

19 世紀半ばの自由主義的変化

1789 年に起きたフランス革命と、革命の波及を恐れたヨーロッパ各国の干渉により勃発したフランス革命戦争のさなか、オランダ本国は 1795 年にフランス革命軍によって占領され、フランスの衛星国としてバタヴィア共和国（1795 年～1806 年）となる。1806 年にバタヴィア共和国に代わって成立したホラント共和国（1806 年～1810 年）は、1810 年にはフランス帝国皇帝ナポレオン・ボナパルト（Napoléon Bonaparte, 1769-1821）によってフランス帝国に併合された。その後勃発したナポレオン戦争終結後の 1815 年に開かれたウィーン会議においてネーデルラント連合王国が成立すると憲法が発布された。国王は政策決定権を与えられ、立法や司法にも大きな影響力を持った。国王の影響は「議会」（Staten-Generaal）にも及んだ。国王は終身の第一院（上院）を任命し、州議会によって選ばれる第二院（下院）の構成と機能に対しても影響力を持っていた[1]。

1840 年と 1848 年に憲法が改正された。特に 1848 年は、ヨーロッパ各地で革命（1848 年革命）の嵐が吹き荒れた年であり、オランダもその影響を逃れなかった。自由主義者の指導者トルベッケ（Johan Rudolf Thorbecke, 1798-1872）は憲法の草案を議会に提出すると、連邦議会はそれをただちに承認した。その中で最も重要であったのは、第一院の議員が、国王によってではなく、直接選挙によって選ばれる州議会議員によって選ばれることが記されたことである[2]。これによって、政府は国王に対してではなく、議会に対して責任

を負う議員内閣制が成立した。さらに、第二院の議員は直接選挙によって選ばれることが記された。その他、少数派の宗派も含め、全ての宗教に平等な法的地位を与えたこと、国家による公教育を定めたこと、言論、集会の自由を保障した[3]。こうして、現在のオランダの基礎が築かれたのが 1848 年であった。

この自由主義的な変化は、社会内部に自由主義的な動きがあったことによるものではなく、ヨーロッパ全体の動向に連動したものであったため、その後自由主義が支配的な勢力となることはなく、自由主義、プロテスタント、カトリックなどが互いに拮抗し、時に協力する状態が続いた。しかしその後、産業資本主義や自由主義が勢力を増したため、これに対抗すべくプロテスタントの運動が活発化し、1878 年には A.カイペル（Abraham Kuijper, 1837-1920）率いる「反革命党」（Anti-Revolutionaire Partij : ARP）が設立された[4]。自由主義者たちは 1885 年に「自由主義連合」（Liberale Unie）を設立した。ローマ・カトリックの指導者ヘルマン・スハープマン（Herman Schaepman）も 1883 年に政治的マニフェストを掲げるが、政党発足には至らず、「国家カトリック党」（Rooms Katholieke Staats Partij : RKSP）が設立したのは 1926 年であった[5]。1897 年、1905 年、1913 年の選挙を通じて、第二院の最大勢力となったのは「自由主義連合」であった。

労働組合の設立と社会主義運動

一方、19 世紀後半のオランダでは、工業化に伴って発生した労働問題によって労働組合が設立され、それが社会主義運動と結びつき、次第に新興の政治勢力として発言力を増してゆく。1850 年代から 60 年代のオランダでは、植字工、タバコ職人、家具職人などに大量生産技術が導入された結果、労働の低賃金化を招いていた。オランダには、泥炭労働者、ポルダー労働者、鉄道労働者、農業労働者の間にはストライキの伝統があり、都市の労働者の手本となったことなどが、労働組合の誕生に繋がったという[6]。植字工が 1866 年に設立した「全オランダ植字組合」（Algemeene Nederlandsche Typografenbond : ANTB）は、オランダにおける最初の労働組合である[7]。これに続いて、多くの労働組合が設立された。その主な要求は、賃金の値上げと労働条件の改善であった。しかしながら、初期の労働組合はストライキを起こすために備えた基金もなく組織的に脆弱であり、雇用主に対する劣等感や依存心が強かったため、消滅するものも多かった[8]。1865 年から 1875 年の間に、アルンヘムやフリースラントを中心とした地域を中心として職人たちの組織が設立されたが、それらの多くは雇用主との協力関係に基づくものであった。しかし、職人たちの間に賃金

の値上げを求める声が徐々に高まり、1869 年には労働組合活動家ヘンドリック・ヘルハルト（Hendrik Gerhard, 1829-86）を中心として最初の社会主義労働組合である「オランダ労働者組合」（Nederlandsch Werklieden Verbond : NWV）が設立された。NWV は労働者の権利獲得と政治権力の奪取を謳った第一インターナショナルのオランダ支部となった[9]。NWV に参加した労働組合は殆ど無かったものの、NWV はオランダにおける社会主義の最初のグループとして重要である[10]。NWV は第一インターナショナルと同様に過激で急進的な思想を掲げていたため、殆どの職人や労働者が距離を置いており、1874 年には消滅してしまう。NWV の指導者たちは、1871 年に設立された全オランダ労働者組合（Algemeen Nederlandsch Werklieden Verbond : ANWV）に身を置いていた。この ANWV は実質的には自由主義の多数派のみならず、第一インターナショナルのメンバーや保守的なキリスト教国家主義者とも連携する姿勢を見せ、階級闘争の思想を排し、雇用主との協力関係の中で職人たちの労働条件の改善を求めていこうとしていた[11]。

そのような国際主義を否定した社会主義以外の労働組合としては、カトリックの「Catholic group Association of the Companions of St.Joseph」（1869）、プロテスタントと保守派の「Patriotic Workingmen's Association」（1871）、自由主義左派の「General Dutch Worker's Union」（1871）、プロテスタントの労働組合「Patrimonium」（1876）、ローマ・カトリックのアルフォンス・アリエンス（Alphons Ariens）にる「ローマ・カトリック労働者組合」などが設立されていた。

1878 年には、社会主義を掲げた元 NWV の指導者によって社会民主主義組合（Sociaal-Democratische Vereeniging : SDV）などが設立されたが、1881 年には元ルター派の牧師であった F.ドメラ・ニーヴェンハイス（Ferdinand Domela Nieuwenhuis）によって設立された社会民主主義同盟（Sociaal-Democratische Bond : SDB）に統一された。SDB はオランダにおける最初の社会民主主義政党である[12]。ニーヴェンハイスは 1888 年に党で最初の議員に選出された。SDB は革命的な思想を持っており、議会制度を否定し、無政府主義（アナキズム）を掲げていた。SDB 内部では、これに反対する議会派が増加し、1894 年には社会民主主義労働党（Sociaal Democratische Arbeiders Partij : SDAP）が設立された[13]。SDAP の政治的立場は民主左派であり、労働運動を支持する一方で、議会政治を通じて社会改革を達成しようとしていた[14]。1890 年代の半ばに始まる経済成長は、そうした漸進的な労働運動を可能にしたのであった[15]。また、1894 年は全オランダ・ダイヤモンド労働者組合（Algemeene Nederlandsche Diamontbewerkers Bond : ANDB）が設立

された年でもある。

SDAP の創設者の一人でもあった F.ファン・デル・フース（Frank van der Goes）は、SDAP の理論的、科学的討論の場として 1896 年に『新時代』誌（Nieuwe Tijd）を創刊し、オランダ国内におけるマルクス主義の流布に努めた。ファン・デル・フースとの接触を通じて、多くの著作家、詩人などの知識人が SDAP に加入した。その中には、F.M.ヴィーバウト（Florentinus M. Wibaut）、詩人のヘルマン・ホルテル（Herman Gorter）、ヘンリエッテ・ローラント・ホルスト（Henriette Roland Holst）、ピーテル・ヴィーデイク（Pieter Wiedijk）などが含まれていた[16]。ベルラーヘは、SDAP には加入しなかったが、そうした知識人のサークルと交流を持っていた。

1903 年はオランダの社会主義政党にとっては非常に重要な年であった。大規模な鉄道ストライキの後、政府は社会主義政党に対する締め付けを強化しようとし、労働組合はそれに対してストで応じようとしたが、失敗に終わった。その後、フリース人の詩人で弁護士であった SDAP の P.J.トルールストラ（Pieter Jelles Troelstra）らは、階級のない社会という、社会主義者としてのイデオロギーを示すと同時に、現在の政治システムの中での実現可能な目標に対して働きかけるというより漸進的な方向を打ち出した[17]。

こうして SDAP の党活動においては、革命的な思想は付随的なものとなる一方、SDAP 内部の急進派はトルールストラの改革主義と議会制民主主義への依存を激しく非難するようになる。1907 年には J.C.セトン（Jan Cornelis Ceton）、D.ヴェインコープ（David Wijnkoop）、ヴィレム・ファン・ラーフェステーイン（Willem van Ravesteijn）らは、SDAP の指導者を非難するため、『トリビューン』（De Tribune）紙を創刊した。1909 年に彼らは SDAP を追放されると、ただちにオランダ社会民主党（Sociaal Democratische Partij：SDP）を設立した[18]。1909 年には数百人のマルクス主義者が SDAP を離れ、SDP に合流した。しかし、一般党員はトルールストラを支持していた。第一次世界大戦前夜には SDP は一議席も持たず、大衆運動にはならず、単なる政治クラブでしかなかった。ヴィーバウトやファン・デル・フースは SDAP に残った。第一次世界大戦前夜には、こうして、オランダにおけるマルクス主義者は 2 つに分離したのだった[19]。ヘンリエッテ・ローラント・ホルストも SDAP に留まったが、党派闘争にあらわれた陰湿さに嫌気がさし、心身が衰弱する中で、1911 年には一切の政治活動から身を引く覚悟で SDAP を離党したという[20]。

第一次世界大戦が勃発すると、SDAP はフランスやオランダの社会民主主義政党と同様の反応を示した。ドイツがロシアに対して宣戦布告すると、第二院（下院）は臨時議会を

招集した。SDAP の議員はそれまで軍事予算に反対し、党の指導者は反戦活動や平和運動を党活動の一部として認めてきた。議会では、中立の立場は厳守するものの、SDAP の下院議員の多くは内閣が求めていた軍の予算を認めたのだった[21]。トルールストラは議会において体制への支持を表明した。トルールストラが手を返したように軍国主義、国家主義の方向性に転換したことに対して、SDAP 内部の平和主義者や非軍国主義者から批判が噴出した。その急先鋒はトルールストラの友人であったマルクス主義理論家のルドルフ・クイペル（Rudolph Kuyper）であった。クイペルは小冊子を発行してトルールストラを非難し、社会民主主義の平和主義者と非軍事主義者を結集した[22]。こうした第一次世界大戦をめぐる一連の政治的な動きは、例えばベルラーヘが 1915 年に出版した『人類の聖堂』における平和主義と国際主義の提唱など、ベルラーヘの思想にも多少なりとも影響を及ぼしたと考えられる。この点については第 4 章の中で考察を行う。

1918 年 11 月 11 日、P.J.トルールストラは、ブルジョワジーがプロレタリアートに権力を譲るときが来たとロッテルダムにおいて宣言し、翌日の議会演説でもそれを繰り返した。この突然の革命的な弁論は、ドイツ革命の過大評価や、その前の週に起きたオランダ軍部の暴動や民間人の抗議運動、ロッテルダム市長ツィンメルマン（Zimmerman）によるプロレタリアートへの権限移譲に対する肯定的な発言によって引き起こされたものと考えられている。トルールストラは議員、労働組合の指導者たち、SDAP の指導者たちにことごとく否定され、その発言は社会主義者に対する反発を招き、1920 年代のオランダ政治を保守的な方向に導いた[23]。

このように、19 世紀後半から 20 世紀初頭のオランダ社会は、政治的にはカトリック、プロテスタント、社会主義、それらよりは緩やか繋がりとしての自由主義という 4 つの柱を中心に構成されていった。このような宗教やイデオロギーの違いは、その後のオランダにおいて、政党活動に留まらず、人々の生活全てに影響を与えるようになってゆく。第一次世界大戦の頃から 1960 年代まで存在していたオランダ社会のシステムは「柱状化」（verzuiling）社会と呼ばれ、政党を頂点として、雇用者団体、労働組合、農民団体、学校、大学、新聞、出版社、放送局、医療システム、スポーツクラブ、銀行、保険などにわたって、徹底して独自の系列化・組織化が進められ、社会的な棲み分けがなされた[24]。（なお、オランダ社会においては、以前として柱状的な風潮は残っている。）

1-3.　オランダの経済と工業化

ナポレオン戦争終結後の1815年に開かれたウィーン会議においてネーデルラント連合王国が成立した後、1830年には蘭領東インド総督ファン・デン・ボス（Johaness van den Bosch）により「強制栽培制度」[25]が導入された。これは、蘭領東インドの原住民にヨーロッパ向けの輸出用作物を栽培させ、原住民の首長を通じて取得した生産物を植民地政庁が指定した工場で加工したのち、1824 年に設立された国策会社であるオランダ商事会社（Nederlandsche Handel Maatschappij : NHM）が独占的にヨーロッパへ輸送し販売するというものであった[26]。「強制栽培制度」導入の目的は、ナポレオン戦争（1803 年～1815 年）への参戦、ベルギー独立革命（1830 年）に対する軍事的侵攻、蘭領東インドにおけるパドリ戦争（1821 年～1837 年）やジャワ戦争（1825 年～1830 年）などの反植民地戦争に対する軍事費など、多額の支出を強いられたオランダ本国政府の危機的な財政状態を克服することであった[27]。要するにこれは、植民地の原住民に課した強制労働で得られた生産物を、オランダ伝統の中継貿易によって利益を得ることを企図していたのである。「強制栽培制度」の運用は成功して莫大な利益を上げ、オランダ本国政府の財政は好転し、本国では多くの企業が設立され、大規模な設備投資が可能となり、オランダの工業化と近代化を助けることとなった[28]。

しかしその一方で、蘭領東インドの原住民に対する搾取は過酷を極めていたことは事実である。社会批評家で、1839 年から 1852 年まで蘭領東インド各地で植民地官吏として勤務していたエドゥアルト・ダウエス・デッケル（Eduard Douwes Dekker）は、オランダ本国に帰国後の 1860 年に、「ムルタトゥーリ」（Multatuli）の筆名で、オランダによる植民地支配の過酷な実態を内部告発した小説『マックス・ハーフェラール』（Max Havelaar）を発表して世論に大きな影響を与えた。その後、オランダ議会の中で「強制栽培制度」に反対する自由主義勢力が発言力を増し、1870 年には「強制栽培制度」は段階的に廃止されることが決定され、これに代わって「砂糖法」と「農地法」が施行された[29]。しかしながら、植民地支配そのものはその後も続いたのだった。

19 世紀半ばまでのオランダでは、工業化は殆ど進展せず、農業が主要な産業のままであった。つまりオランダの工業化は、隣接するドイツやベルギーのように、イギリスに始まった産業革命の波に即座に乗ることはできずにいた。それというのも、オランダはイギリス、ドイツ、ベルギーほどには天然資源に恵まれていなかったため、オランダにおける工

業化とは、そうした国々のように鉱工業、石炭業、綿工業などにおける大規模なものではなく、家族で営業しているような小規模な製造業者（家内工業的零細経営）における工業化を指していたのである[30]。そのため工業化の速度は周辺諸国に比べ遅く、生産方法は前資本主義的な性質を持つものが多かった。多くの産業は地方にあり、南部に行くほど封建的な考えの経営者が多かった。（社会主義や労働運動の中心が、封建的な生産方法に殆ど影響を受けていなかったオランダ北部であった[31]のは、そうした理由によるものと思われる。）また、工業化の遅延は、輸送網の基盤整備の遅延によるものであるとの指摘[32]もある。

1848 年に憲法が改正されたこと、1849 年以来の自由経済政策、鉄道や運河等の産業基盤整備、海上運輸、ライン河航行の発展、ロンドンで開催された万国博覧会（1851 年）の刺激等によって、1850 年から 70 年にかけてオランダはようやく産業革命の時期を準備した。1870 年ごろまでに後背地ドイツの産業発展、蘭領東インドの「強制栽培制度」廃止による自由農業企業の発展が自由貿易に拍車をかけ、植民地物産の加工業や中継貿易を繁栄させた[33]。

こうして 1870 年頃から始まった工業化は、1890 年代に生産の機械化が急速に進行し、1914 年までにはオランダは近代的な工業国家へと変貌を遂げつつあった[34]。オランダにおける工業化は、大都市の中心において進展したのではなく、地方都市（メロー・エンスヘデの紡績工場、フェイエノールトの造船・機械、ウェルクスポールの機械、マーストリヒトのガラス・製陶など[35]）において進展したため、労働者階級は各地に分散する結果となった[36]。ロッテルダムやアムステルダムには多数の港湾労働者がいたものの、どちらも工業都市ではなかった。ロッテルダムは輸送の中心であり、アムステルダムは商業、金融、行政の中心であった[37]。

1-4. オランダの人口と都市問題

1-4-1. オランダの人口

オランダ全体の人口は、1830 年には 261 万人であったのが、19 世紀末には 510 万人にまで増加し、その後も増加を続けた（表 1-1）。オランダはヨーロッパでも最も都市化の進んだ国の一つである。1850 年には全人口の 21.7%が都市に集中しており、1900 年には 39.3%、1920 年には 45.7%にまで増加した[38]。

Table I.1. *Population in the Netherlands at census counts, 1815–1971, with sex ratio and average annual rate of increase.*

Year	Total × 1,000	Males × 1,000	Females × 1,000	Sex ratio F/M	Total population index (1830=100)	Population per km²	Average annual rate of increase
1830	2,613	1,278	1,335	1.045	100	80	
1840	2,861	1,401	1,460	1.042	109	88	0.95
1849	3,057	1,499	1,558	1.040	117	94	0.76
1859	3,309	1,629	1,680	1.031	126	101	0.82
1869	3,580	1,764	1,815	1.029	136	109	0.82
1879	4,013	1,983	2,030	1.023	152	122	1.21
1889	4,511	2,228	2,283	1.024	173	139	1.24
1899	5,104	2,521	2,584	1.025	192	154	1.31
1909	5,858	2,899	2,959	1.021	224	180	1.48
1920	6,865	3,410	3,455	1.013	263	211	1.72
1930	7,936	3,943	3,993	1.013	304	244	1.56
1947	9,625	4,838	4,878	1.008	368	296	1.25
1960	11,462	5,754	5,802	1.008	439	352	1.47
1971	12,709	*6,465	*6,493	*1.004	486	390	0.99

Sources: CBS, as reported in Van der Woude, 'Bevolking en gezin'; and Bos, 'Long-term demographic development'.
* Figure for 1969.

表 1-1：1830 年から 1971 年までのオランダの人口（増加率）

Table 1.

Number of inhabitants of Amsterdam, the inner city of Amsterdam and the rest of the town according to the censuses of 1859 till 1960 (Interim-report, p. 8) and in the year 1965.

Year	Amsterdam	Inner City	Rest of the town
1859	239,281	233,948	5,333
1869	263,415	255,451	7,964
1879	312,143	280,724	31,419
1889	404,507	310,067	94,105
1899	507,887	302,484	205,403
1909	562,017	268,180 [1])	293,837
	562,017	230,929 [2])	331,088
1920	679,443	216,472	462,971
1930	753,369	151,396	601,973
1947	802,708	115,222	687,486
1960	864,747	100,944	763,803
1965 [3])	862,488	84,381	778,107

表 1-2.　1859 年から 1965 年までのアムステルダムの人口

産業革命、工業化がもたらした都市への急激な人口集中は、投機対象としての住宅の増加、その結果としての居住環境の悪化という社会問題に直結した。1860 年には約 24 万人だったアムステルダム市の人口は、1870 年付近を境に一気に増加傾向に転じ、1880 年には約 31 万人、1900 年には約 51 万人にまで膨れ上がった。都市部の急激な人口増加により住宅の絶対数が不足するとともに、居住環境、衛生状態は劣悪で労働者の生活環境は悲惨を極め、その改善は国家の喫緊の課題となっていた。その状況はアムステルダム市の検査官の次の言葉が物語っている。

「木製の床はすりへり、地面が見えてしまっている。不快な臭いが家中に充満している。外壁のひびが内側まで伸びてきてしまっている。壁は非常に湿気を含んでおり、壁紙がはがれ落ち、カビが生えている。室内は日中にも関わらず非常に暗く、検査官がメモを取るのに蝋燭が必要であった。全く修理が施されていない家には虫が這いずり回り、子供たちは家族が使用するトイレと繋がった床で寝ている…。」[39]

アムステルダムの最下層の人々が住む地区の住居には湿気が蔓延し、衛生状態は悪く、階段は暗く急であり、害虫が蔓延っていた。これは最悪の例であるが、それでも、アムステルダムにおける劣悪な住宅事情は、そうした最下層の人々に限られたことではなかった[40]。

図 1-1：アムステルダムの 19 世紀の投機的住宅

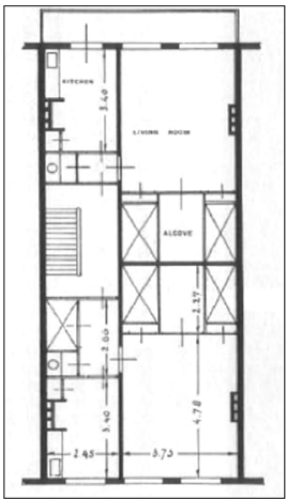

図 1-2：アムステルダムの典型的なアルコーブ型就寝空間型住宅

あらゆる労働者は不動産市場の影響にさらされていた。地価の上昇と、住宅不足に乗じた不動産業者による投機的な住宅の建設が蔓延していた。事務職や下級官吏といったホワイトカラーの労働者や、教師なども、港湾労働者、建設作業員、ダイヤモンド研磨工などと同様にそうした影響を逃れなかった[41]。世紀転換期において、アムステルダムの人口の多数が劣悪な住環境に苦しんでいることが明らかになると、改革の必要性が論じられるようになる。改革派はスラムの現状を出版を通じて世に知らせ、直接的な影響を受けていない人々も住宅問題に関心を持つようになった。

1-4-2. 1902 年の「住宅法」（Woningwet）

19 世紀末においては、住宅不足の問題は慈善活動機関が取り扱っていた。善意の富裕階級や人道主義的な社会主義によって動かされた個人が、1851 年に「労働者階級のための組合」を設立し、住宅建設を行った。これに続いてオランダ各地で組合が設立され、住宅を供給していたが、それらの多くは慈善活動的な側面と同時に投機的な側面を持ち合わせており、住宅建設によって生じた利益は良質な住宅建設へ還元されることはなかった[42]。その後、1860 年代には労働者自らが協同組合を設立し、住宅建設をマネージメントする試みも見られる[43]。自治体レベルでも住宅に関する規制は存在していたが、中途半端なもので、労働者の居住環境を改善するには至らなかった[44]。労働者の居住環境の真の改善には、国が政策として取り組む必要があったのである。

国も住宅問題に無関心だったわけではない。1840 年代後半から 1850 年代前半にかけて、劣悪な住宅地区を中心としてコレラが蔓延したことにより、オランダ政府は「王立技術者協会」に問題の所在と救済策を検討させた結果、建物の高さ、隣接距離、換気、採光、暖房、トイレ、下水道設備等を改良する必要があるという報告が提出されたものの、人口が増加し続けていた都市の中心部では、もはや改善することが不可能なほどにスラム化が進行していた。その後、1896 年には『国民住宅の質問』と題された報告書が出版された。これは建設組合に対する低利率での資本の貸付、同組合への低価格での土地の払い下げ、建築物の集団既定の作成、スラム街一掃のための土地収用権の使用を推薦したものであった[45]。

こうした流れを受け、自由統一党出身の H.G.ボルヘジウス（Hendrik Goeman Borgesius, 1847-1917）[46]は、「社会正義内閣」と呼ばれたピーアソン内閣

（Kabinet-Pierson, 1897-1901）時代に内務大臣を務め、1899 年には「住宅法（Woningwet）」の法案を提出した。法案は 1901 年に可決され、1902 年の 7 月 2 日に施行された。この法律によって、自治体が住宅や都市の問題に働きかけることが公的に認められたことになる[47]。

その第 1 条は「住宅の質に関する基準」であった。これは都市計画について定めた第 6 条と共に法的拘束力を持っていたため、アムステルダム市議会は新しい住宅の質を規定するための建築条例を定めなければならなかった。こうして 1905 年にはアムステルダムで最初の「建築条例」（bouwverordening）が導入されたことは、居住環境の水準の大幅な向上に繋がるものであると同時に、建物の美的側面が重視されることを意味していた。

また、「住宅法」によって地方自治体は、自治体自身か、あるいは住宅条件を改善する目的のためだけに設立された住宅組合によって建てられる住宅に対して、国からの借金を申請することが可能になった。そうした組合は、商業的な建設主に対してモデルを提供することとなった。商業的な建設主も、引き上げられた住宅の基準に劣らない安くて優れた物件を作らざるを得なくなると考えられたのだ。もちろん、全く利益の上がらないような、民間業者が扱わないような物件に対しては、政府や自治体が手掛けることもあったが、「住宅法」の趣旨は、政府や自治体が全てを賄うことではなく、居住環境の水準が高いものを、政府・自治体または住宅組合によって建てられた住宅において実現し、民間業者に模範を示すことが目的であり、住宅建設はあくまでも民間によってなされることが求められていた[48]。

1-4-3. 住宅組合の設立と集合住宅建設への建築家の関与

住宅法の成立後、投機的要素を排除し、住宅建設のみを目的とした協同組合運動が活発化し、1906 年までに 14 組合が設立され、1918 年から 20 年にかけては、743 もの組合が設立され、さらに 1922 年までに 1341 もの組合が設立された。これらの住宅法の成立後に設立された住宅組合の中でも、最も古く、活発な住宅組合とされるロッホダーレ住宅組合（Woningbouwcorporatie Rochdale）は、集合住宅の建設に際して建築家ファン・デル・ペック（Jan Ernst van der Pek）を雇用した。これは、住宅組合が集合住宅に際して建築家を雇用した初の事例であったと言われている。住宅法成立以前の

19 世紀における投機的住宅の建設業者は、計画から建設に至るまでほぼ全ての過程を管理していたことを考えると、これは画期的なことであった。1910 年から 1923 年の間、アムステルダムの住宅組合は 11,867 戸の住宅を建設し、アムステルダム市は 4,710 戸の住宅を建設している。

「住宅法」の遂行のため、アムステルダム市は 1902 年に「建設・住宅検査局」（Bouw en Woningtoezicht）を設立し、J.W.C.テレヘン（J.W.C.Tellegen）が局長に就任する。テレヘンは基準以下の住宅をなくすために努力したが、既存の住宅を排除することは容易ではなかった。1914 年になってようやく、社会民主主義労働党（SDAP）によって提案された市営住宅の建設が承認された。市議会によって、住宅建設を担当する市議会議員が指名され、助言委員会が設立された。また、市営住宅や新たに設立された住宅組合を監督するための組織として、「住宅局」（Woningdienst）が設立された[49]。

1914 年以降になると、社会民主主義者が重要なポストに就き、SDAP の党の方針が住宅改良に反映されてゆく。住宅建設を担当した最初の市議会議員は、SDAP の主要メンバーの F.M.ヴィーバウト（F.M.Wibaut）であったし、「住宅局」の初代局長は、「住宅法」の成立以来、住宅問題に関わり続けてきた A.ケプレー（Arie Keppler）であった[50]。

第一次世界大戦によって引き起こされた建設材料不足と労働力不足により、住宅産業は崩壊に瀕したため、政府が大量の資金を投下せざるを得ない状況に陥った。第一次世界大戦がはじまった 1914 年から 1922 年にかけては、住宅組合と自治体によって建設される住宅の数が、民間の業者による数を上回った。この時期には、自治体が実質的に住宅建設を担う存在となったのである。これは、アムステルダム派の活躍とも大いに関連していると思われる。その後、政府は民間セクターの刺激策として補助金の交付なども行っている。こうして、アムステルダムにおける住宅改革は、19 世紀から 20 世紀にかけて、アムステルダム市（行政）が住宅の質に責任を持ち、同時に方針決定を行っていくというように、大きな変化を遂げたのである。こうした経緯から、アムステルダム市の住宅建設に大きくコミットすることになったアムステルダム市やその付属組織にアムステルダム派の建築家やアムステルダム派を擁護する人物が多かったことが、1910 年代後半から 20 年代半ばにかけてのアムステルダム派の活躍に直結していたといえる。

1-5.　19 世紀末以降のオランダ文芸運動

19 世紀以降のオランダの文学や芸術の動きを見ると、まず、1837 年に E.J.ポットヒーテル（Everhardus Johannes Potgieter）が創刊した雑誌『道案内』（De Gids）誌の影響のもと、ヤコブ・ファン・レンネップ（Jacob van Lennep）の歴史小説や、詩人でもあった J.A.アルベルディンク・テイム（Josephus Albertus Alberdingk Thijm）、C.ブスケン・フーエト（Conrad Busken Huet）らが活躍した。しかし、19 世紀末になると、『道案内』は伝統主義的な文学雑誌と看做されるようになっていた[51]。1880 年代のアムステルダムの詩人や文筆家などからなる芸術家たち、通称「80 年代の人々」（Tachtigers）はオランダ文学界を支配していた伝統主義的な慣習を打ち破り、新しい風を吹き込もうとする運動を展開した。これは「80 年代の運動」と呼ばれたもので、内田（1998）によると、「その運動は、当初は資本主義的近代化をオランダ文化再生の好機と捉える文芸復興運動として始まり、そのなかで、オランダの黄金時代であった 17 世紀オランダ文化を生みだした、あるいは担った思想や文芸活動、さらには他のヨーロッパ諸国における国民文学形成の運動や思想を積極的に研究した。」[52]とされており、「80 年代の人々」（Tachtigers）と呼ばれたヘルマン・ホルテル（Herman Gorter）、ヴィレム・クロース（Willem Kloos）、アルベルト・フェルヴェイ（Albert Verwey）らは、個人主義的な詩のスタイルを追求した。「80 年代の人々」を代表する雑誌は、伝統主義的な『道案内』誌に対抗して 1885 年に創刊された『新道案内』誌（De Nieuwe Gids）であった。『新道案内』誌の副題は「文学、芸術、政治、科学のための雑誌」とされており、実際に誌や文学のみならず、政治に関する話題が多くのページを占めていた。中でも詩人のヴィレム・クロース（Willem Kloos）は、「芸術は、最も個人主義的な感情の、最も個人主義的な表現であるべきである。」[53]と唱えて極端な個人主義とロマンティシズムに芸術の基盤を求めていた。

1890 年以降にはそうした個人主義は行き詰まりを見せ、もはや芸術の確かな拠り所とはなり得なくなっており、『新道案内』誌内部において亀裂が生まれた[54]。『新道案内』誌の主要メンバーであり、ベルラーヘとも親交が深かった A.フェルヴェイは W.クロースと対立し、1889 年には袂を分かつとともに、個人主義や審美主義から距離を置き始まる。1894 年には L.ファン・デイセル（Lodewijk van Deysel）と共に『隔月雑誌』（Tweemaandelijksch tijdschrift）を創刊する（1902 年以降は『20 世紀（De XXe eeuw）』誌と改称）。1905 年に創刊した『運動』（De Beweging）においては『新道案内』誌の方向性を大きく修正し、

以後 1920 年代にかけてオランダ文学界において中心的な役割を果たしていく。フェルヴェイは芸術家に課せられた第一の役割は、個人的な感情を表明することではなく、個人と共同体を包みこむイデア、精神的な力を表明する芸術に向かうべきであると考えるようになっていた。ファン・デイセルは、こうした動きを「ゾラからメーテルリンクへ」と表現し、自然主義から神秘主義への発展と捉えた[55]。

こうした神秘主義への傾向は世紀転換期のヨーロッパにおいてしばしば見られたもので、「知覚を越えた世界に接触をはかろうとするもの」であり、その形而上学的な方向性は、神智学、仏教、新プラトン主義、精神主義、オカルティズム等、様々な形となって表れたという[56]。ベルラーへの様々な言説から、神智学への接触は確かにあったと思われるが、検証のための素材の少なさから、具体的にどのような形で関わりがあったのかは全く明らかにされておらず、本論文においても取り扱ってはいない。

『新道案内』誌の個人主義的傾向に対するもう一つの方向性は社会主義であった。政治評論家で後に SDAP の創設者の一人となった F.ファン・デル・フース（Frank van der Goes）は資本主義を芸術の退廃の原因と考えてマルクス主義に基盤を求め、それにジャーナリストの P.L.タ－ク（Pieter Lodewijk Tak）が共鳴する[57]。P.L.タークは、1895 年に『クロニクル』誌（De Kroniek）を創刊し、編集長を務めた[58]。『クロニクル』誌は『新道案内』誌に相対する立場をとり、歴史家のヨハン・ハイツィンハ（Johan Huizinga）、画家・詩人・美術評論家のヤン・フェト（Jan Veth）、作曲家のアルフォンス・ディーペンブロック（Alphons Diepenbrock）、画家のアントーン・デルキンデレン（Antoon Derkinderen）、ヤン・トーロップ（Jan Toorop）、R.N.ローラント・ホルスト（R.N. Roland Holst）、その妻で詩人のヘンリエッテ・ローラント・ホルスト（Henriette Roland Holst）、芸術家のマリウス・バウエル（Marius Bauer）、社会民主主義者のヘンリ・ポラーク（Henri Polak）、そしてベルラーへなどの投稿者たちの受け皿となった[59]。『クロニクル』誌の周囲の人々は、個人主義に対抗し、芸術は社会にコミットすべきであると考えた人々であったことを、『クロニクル』誌に掲載された投稿文の表題がよく表している[60]。

『新道案内』誌における議論は、芸術が社会に関わるべきか否かという議論であったが、『クロニクル』誌の投稿者たちにとっては、芸術が社会に関わることについては既にそうすべきであるという結論が出ていたのであり、議論は、その関与がいかなる形態を取るべきなのかという方法論上の問題となっていた。この点ついては第 3 章の 3-4-1 で考察を行う。

小括

19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、オランダは経済、政治、人口、インフラ、宗教、文化等のあらゆる側面において急激な変化を経験した。特に 1890 年代以降は、オランダ社会が大きく転換した時期であった。そうした変化は、近代化を遂げた他の国家と似た側面を持っていた。オランダの工業化は、後背地であるドイツの工業化の恩恵を受けて、また、1849 年以来の自由主義政権による近代化政策と産業基盤整備を経て行われたとされているが、蘭領東インド（現インドネシア）において原住民に課した強制労働から得られた莫大な利益がオランダ国内のインフラとしての輸送網の建設を可能にしたということも示された。いずれにせよ、工業化の結果としてオランダは経済力を強めていった。政治的には、1848 年の憲法改正以降、自由主義、プロテスタント、カトリックの三大勢力により議会制民主主義の政治が行われたが、工業化や農業恐慌や農業不況に伴う飢餓、急速な都市化が生んだコレラやインフルエンザ等の疾病、失業等が発生し、社会問題となり、特にアムステルダムをはじめとするオランダ北部において労働運動や社会主義運動を生み出した。1860 年代から徐々に労働組合運動が活発化し、1890 年代には社会主義政党が発足し、議会に加わるまでに至った。急激な都市への人口集中は、都市のスラム化を生むとともに、慢性的な住宅不足をもたらした。1902 年の「住宅法」の成立後、住宅における投機的要素を排除し、住宅建設のみを目的とした協同組合運動が活発化し、住宅建設に建築家が参与する機会が生まれた。自治体が都市問題に直接関与することが認められ、中でもアムステルダム市は 1905 年に「建築条例」を定め、居住環境の水準とともに、美的水準を定めた。1914 年以降は、社会民主主義労働者党（SDAP）が住宅建設に大きく関っていった。第一次世界大戦によって民間の住宅産業は崩壊の危機に瀕し、代わって自治体が実質的に住宅建設を担う存在となった。文芸運動は政治・経済と連動する側面を持っていた。「80 年代の運動」は、資本主義的近代化をオランダ文化再生の好機と捉える文芸復興運動であり、その特徴は極端な個人主義とロマンティシズムに芸術の基盤を求めたものであったのに対し、「90 年代の運動」は、資本主義を芸術の退廃の原因と考えてマルクス主義、社会民主主義に基盤を求めるとともに、芸術は社会に奉仕するべきであるという理念を持ち、「コミュニティ・アート」を追求するものであった。

[1] 栗原福也『ベネルクス現代史』，山川出版社，1982 年，p.105.

[2] Linden, Marcel van der, and Jürgen Rojahn, *The Formation of Labour Movements, 1870-1914: An International Perspective, Contributions to the history of labour and society, v. 2*, Leiden: E.J. Brill, 1990, p.59.

[3] Fremont-Barnes, Gregory, *Encyclopedia of the Age of Political Revolutions and New Ideologies, 1760-1815,* Westport, Conn: Greenwood Press, 2007, p.208.

[4] Linden, Marcel van der, and Jürgen Rojahn, *op cit.*, p.59.

[5] State, Paul F., *A Brief History of the Netherlands,* New York: Facts On File, 2008, p.44.

[6] Linden, Marcel van der, and Jürgen Rojahn, *op cit.*, p.60.

[7] Velde, Henk te, and Hans Verhage, *De eenheid & de delen: zuilvorming, onderwijs en natievorming in Nederland 1850-1900,* Amsterdam: Het Spinhuis, 1996, p.86.

[8] Linden, Marcel van der, and Jürgen Rojahn, *op cit.*, p.61.

[9] State, Paul F., *op cit.*, p.150.

[10] Welcker, Johanna Maria, *Heren en arbeiders in de vroege Nederlandse arbeidersbeweging 1870-1914*, Amsterdam: Van Gennep, 1978, p.663.

[11] Bank, Jan, and Maarten van Buuren, *Dutch Culture in a European Perspective. 3, 1900, the Age of Bourgeois Culture,* Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2004, p.390.

[12] Linden, Marcel van der, and Jürgen Rojahn, *op cit.*, p.62.

[13] Linden, Marcel van der, and Jürgen Rojahn, *op cit.*, p.67.

[14] Blom, J. C. H., and Emiel Lamberts, *History of the Low Countries,* New York: Berghahn Books, 1998, p.413.

[15] Linden, Marcel van der, and Jürgen Rojahn, *op cit*, p.67.

[16] Schmitt, Hans A., *Neutral Europe between War and Revolution, 1917-23,* Charlottesville: University Press of Virginia, 1988, p.180.

[17] Blom, J. C. H., and Emiel Lamberts, *op.cit.*, p.414.

[18] Blom, J. C. H., and Emiel Lamberts, *op.cit.*, p.414.

[19] Schmitt, Hans A., *op.cit.*, p.180.

[20] 内田博「ライフスタイルとしての社会主義ーヘンリエッテ・ローラント・ホルストにおけるマルクス主義批判と宗教的社会主義」，マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究（38), 3-16, 2001-11.

[21] Schmitt, Hans A., *op.cit.*, p.186.

[22] Schmitt, Hans A., *op.cit.*, p.187.

[23] Schmitt, Hans A., *op.cit.*, p.186.

[24] Zanden, J. L. van, and Arthur van Riel, *The strictures of inheritance: the Dutch economy in the nineteenth century,* The Princeton economic history of the Western world. Princeton,

N.J.: Princeton University Press, 2004, p.242.

[25] オランダでは単に「栽培制度」(Kultuurstelsel) と呼ばれていたという。その骨子は、ジャワの農民や小作人に対して耕作地の 20%、もしくは労働時間の 20%を東インド政庁が指定した農作物の栽培に割くように強制するものであった (ムルタトゥーリ, 佐藤弘幸訳『マックス・ハーフェラール—もしくはオランダ商事会社のコーヒー競売』めこん, 2003 年, p.492.)

[26] Ricklefs, Merle Calvin, *A history of modern Indonesia since c.1200*, Stanford University Press, 2001, p.156.

[27] Ricklefs, Merle Calvin, *op.cit.*, p.155.

[28] Santosa, Adi, *'A review of the emergence of Indonesian modern interior design'*, In: *DIMENSI INTERIOR*, Vol.1, No.1, 2003, p.16.

[29] 「砂糖法」により、農民の稲作を犠牲にして強制され、慢性的な飢饉の原因となっていたサトウキビ栽培から廃止することで「強制栽培制度」が段階的に廃止されてゆき、1890 年には完全に廃止された (ただしコーヒーについては 20 世紀初頭まで廃止されなかった)。そして「農地法」により民間資本の参入が自由化された (ムルタトゥーリ, 佐藤弘幸訳, 前掲書, p.492.)

[30] Schmitt, Hans A., *op.cit.*, p.177.

[31] Linden, Marcel van der, and Jürgen Rojahn, *The Formation of Labour Movements, 1870-1914: An International Perspective. Contributions to the history of labour and society*, v. 2. Leiden: E.J. Brill, 1990, p.57.

[32] Andersson-Skog, Lena. *Institutions in the Transport and Communications Industries State and Private Actors in the Making of Industrial Patterns, 1850-1990,* Canton, Mass: Science History Publ, 1999, p.81.

[33] 栗原福也, 前掲書, pp.80-82.

[34] Schmitt, Hans A., *op.cit.*, p.177.

[35] 栗原福也, 前掲書, pp.80-82.

[36] Linden, Marcel van der, and Jürgen Rojahn, *op.cit.*, p.57.

[37] Schmitt, Hans A., *op.cit.*, p.177.

[38] Linden, Marcel van der, and Jürgen Rojahn, *op.cit.*, p.57.

[39] Stieber, Nancy, *Housing Design and Society in Amsterdam: Reconfiguring Urban Order and Identity, 1900-1920*, Chicago: University of Chicago Press, 1998, p.15.

[40] Stieber, Nancy, *op.cit.*, p.18.

[41] Stieber, Nancy, *op.cit.*, pp.18-19.

[42] ドナルド・I・グリンバーグ(矢代真己訳)『オランダの都市と集住:多様性の中の統一 1900-40』, 住まいの図書館出版局 , 1990 年, pp.37-39.

[43] ドナルド・I・グリンバーグ, 前掲書, p.39.

[44] ドナルド・I・グリンバーグ, 前掲書, p.58.

[45] ドナルド・I・グリンバーグ，前掲書，pp.62-63.

[46] ホルヘジウスは義務教育法、住宅法、使用者責任補償法の制定に尽力した。

[47] Stieber, Nancy, *op.cit.*, p.20.

[48] Stieber, Nancy, *op.cit.*, p.20.

[49] Stieber, Nancy, *op.cit.*, p.21.

[50] Stieber, Nancy, *op.cit.*, p.21.

[51] Merriam-Webster, Inc, *Merriam-Webster's encyclopedia of literature*, p.462.

[52] 内田博「詩人として社会主義へ　ヘンリエッテ・ローラント・ホルスト小伝」『藤女子大学・藤女子短期大学紀要』第 2 部，第 36 号，1998 年.

[53] Reitsma, Anneke, *Een naam en ster als boegbeeld, Assen*, Van Gorcum, 1998, p.37.

[54] Hermans, Theo, *A Literary History of the Low Countries,* Rochester, N.Y.: Camden House, 2009, p.474.

[55] Hermans, Theo, *op.cit.*, p.493.

[56] Hermans, Theo, *op.cit.*, p.493.

[57] Gerber, John Paul, *Anton Pannekoek and the Socialism of Workers' Self- Emancipation, 1873-1960,* Dordrecht: Kluwer Academic, 1989, p.8.

[58] Meijer, Reinder P., *Literature of the low countries: a short history of Dutch literature in the Netherlands and Belgium*, Stanley Thornes, 1978, p.246.

[59] De Westenholz, Caroline, *Albert Vogel, voordrachts- kunstenaar (1874 - 1933)*, Amsterdam University Press, 2003, p.21.

[60] Frijhoff, Willem, et al., *Dutch Culture in a European Perspective: 1900, the age of bourgeois culture*, Uitgeverij Van Gorcum, 2004. p.142.『芸術と社会主義』、『大衆のための芸術』、『芸術と科学、社会主義』などが例として挙げられている。

図版出典

1-1.　ドナルド・I・グリンバーグ，前掲書，p.53.

1-2.　ドナルド・I・グリンバーグ，前掲書，p.54.

表の出典

1-1.　Wintle, Michael J, *An Economic and Social History of the Netherlands, 1800-1920: Demographic, Economic, and Social Transition,* Cambridge, UK: Cambridge University Press, 2000, p.9.

1-2.　Universiteit van Amsterdam, *Urban Core and Inner City. Proceedings of the International Study Week Amsterdam,* 11-17 September, 1966. Leiden: E.J. Brill, 1967, p.183.